

処女でないマリア

フェビー・インディラニ 作 野中葉 訳

マリアは妊娠した。男性と交わりを持つことなく。誰とも結婚していないのに。

妊娠を知った時、彼女はとても怖くなった。今は二〇一六年。聖母マリアの身に起こったような奇跡を誰か信じてくれるだろう。大昔、預言者イエスが誕生した時に全ては終わったのだ。今、マリアが誰とも関係を持たずに妊娠したと、誰か信じるだろう。ましてやマリアは処女ではないのだ。

マリア自身は確信していた。彼女は本当に男性との交わりなく、妊娠したのだ。奇跡だ。でも、いったい誰か信じるのか。彼女の日々の生活は、大都会に暮らす人間のそれだった。聖母マリアのように日々を宗教に捧げ、祈り、時間を費やすような生活では決してなかった。彼女はオフィスで働く普通のOLで、副業として、男性雑誌のモデルもやっていた。つまり、比較的露出度の高い服装で、艶やかな姿をカメラの前に晒すことは彼女にとって日常のことだった。でも彼女のの中では、このポーズはOKで、このポーズはダメという境界は引いて仕事を引き受けているつもりだった。

友人たちと一緒にカフェでコーヒーを啜ったり、週末に郊外に遊びに出かけたり、彼氏がいるときには、彼氏とデートしたりことするが息抜きだ。でも、今は、彼氏がない。それなのに、彼女の子宮の中では、何かが生まれ育っていた。妊娠三か月目に入るまで、このことには気が付かなかった。生理が来ないことには気づいていたが、最初の二か月は、おそらく疲れかストレスか何かの原因だろうと思っていた。三か月目に差し掛かり、お腹が時々硬くなってはじめて、彼女はパニックになった。そして、いくつかの妊娠検査薬で調べた。結果はみんな同じだった。彼女は妊娠していた。

最初、彼女は誰かに話したかった。一晩中、一人で考え、泣いて、この重圧に一人で耐えることはできないと感じ、彼女は、高校時代からの一番の親友、サスキアに連絡した。マリアの部屋は、高級な賃貸物件で、入口には、普通の下宿との差別化を図るため、“Residence”というサインが付いている。サスキアがマリアの部屋を訪れた時、マリアはベッドに弱々しく横たわっていた。

「で、父親は誰なの？」

マリアは首を横に振った。「アッラーにかけて、分からない」

「そんなこと、あるわけじゃない……」

マリアは目を閉じた。「そんなこと言われても……、間違いなく、そんな相手いない」

「ねえ、よく考えてみて。酔っぱらって、記憶なくしたこととか、ないの？ その時に誰かと寝て、でも覚えてないってこと、あるかもしれないじゃない」マリアは首を横に振った。「酔っぱらうまでお酒を飲んだことなんてない」サスキアは、困った顔でマリアを見た。

「サスキア、私たち、知り合ってどれくらいになる？私、嘘つきじゃないって、あなたも知ってるでしょ？」

「じゃ、中絶するしかないね？」

マリアは寝返りを打ち、サスキアに背を向けた。

「マリア……」

「もしかしたら、私のお腹にいるのは預言者っていう可能性だってある。終末の日が近いっていう話もある。イーサが再びこの世にやってきて、人間たちを救ってくれるかもしれない。私のこれも、終末の日が近づいているって兆候なのかもしれない」

「うん、でも……、それって、真面目に礼拝して、男性との接触を避けて、神に近付こうとしている聖母マリアのような人ならわかるんだけど……あなたは……、ごめんね、あなたはそんな女性じゃないし」

マリアは再び黙るしかなかった。「そうね……、でも、私、そこまで悪い女じ

やない」。マリアは気を悪くしたように言った。「私は、汚職を働いて他人の権利を奪ったことはない。自分で汗水たらして働いたお金で生活してる。そのうちの仕事の一つがセクシーなモデルだったとしても。時々サボるけど礼拝もするし、税金も納めているし、ごみのポイ捨てなんてしないし、きちんと行列には並んで待つ。泥棒もしない、他人の権利も妨害しない、もちろん、他人の夫と寝るなんていう不倫だってしない……」

サスキアは黙っていた。困った。次に訪れたのは、不快な沈黙だった。サスキアは、マリアに対し、どう振る舞い、何を言えればいいか分からなかった。でも、これは本当に信じがたい現象だということだけは確かだった。

「それで、どうするつもりなの？」

マリアは、また黙った。マリアの目は、泣きつかれたかのように腫れていた。サスキアは、彼女の手を取って言った。

「結婚してくれるっていう男を、一緒に探そう」

「そんな人、いるわけない」

「やってみなくちゃ、分からないじゃない」

二人は、過去にマリアと仲が良かった、あるいは、今現在仲がいい男性たちの名前を挙げて、リストを作ることにした。手始めに、ここ二年くらいの友人関係を書き出してみた。それより以前の知り合いもいたが、おそらく、もうマリアに対しては何の興味もないはずだ。逆に、最近二年間の知り合い、というのは、その意味で、可能性があるかもしれない人たちだった。

「ラマは？」

「新しい彼女ができたばかり」

「リッキーは？」

「宗教が違う。手続きが面倒よ」

「アルダンは？」

「彼は、私のことなんて好きじゃないし」

「ファフミ？」

「本気で言ってる？ ファフミなんか、死んだって願ひ下げだわ」

「ねえ、マリア。いったい何なの？ そんなこと言ってる場合だと思う？ もう誰でもいいじゃない」

「何言ってるの。こんなこと、もうやめよう」

サスキアは不満顔だった。

「じゃ、ギランでいいじゃない。彼とは、まだそんなに長い付き合いじゃないだろうけど」

「ギラン？ 彼はまだ結婚してる。奥さんがいる。」

「え、奥さんがいる人とは不倫しないんじゃないの？」

マリアは、恥ずかしそうに、ここ数時間で初めて、わずかに微笑んだ。「そんなに、しよっちゅうはしてない」

フラストレーションいっぱい表情を浮かべながら、サスキアは、首を横に振った。「そんなことじゃ、男と関係を持たずに妊娠したって、どうして信じられるのよ」

「私を信じてくれないの？」

「誰だって、今のあなたを信じるのは難しいわ」

マリアはまた不機嫌になった。

「でも、私があなただけを信じようが信じまいが、重要なことじゃない。今一番重要なことは、あなたが何をすべきかってことよ。お腹はどんどん大きくなる。この下宿でも、オフィスでも、友達も、家族も、みんなそのうちに気づくわよ。そのうちに、もう隠し通せなくなる……」

「そうね……」

「だから、私が言ってるのは、二つの選択肢しかないってこと。あなたと結婚してくれる男性を探すか、出来るだけ早く中絶するか」

「うーん……どっちも、気が進まないわ」

「気が進むかどうかなんて関係ない、マリア。もう、いい。」
心配そうなマリアの視線をよそに、サスキアは立ち上がった。冷蔵庫を開

け、二つのグラスに水を注いで、一つをマリアに渡し、もう一つを飲み干した。

「やっぱり、ファフミでいいじゃない。一番いい選択よ」。サスキアがはつきりと言った。

マリアは、すぐに首を強く横に振った。

「わかった、じゃ、中絶しなさい」

「ああ、なんでそうなるの？ 女が自立するってことはできないのかなあ。誰とも結婚しないで、子供を一人で産むってことが。貯金ならある。私と子供の生活費くらい、どうにかなる」

「でも……みんなに聞かれるわよ、誰の子供かって」

「私の子よ、当たり前じゃない」

「だから、誰が父親かってことよ」

「父親はいない。マリア様と同じ。マリア様の子供は預言者だった。私の子供だって、そうなのかもしれない」

「どうかしちやってる」

「あなたの方がどうかしてる。私の子を殺せって、そんな風に言うなんて」

サスキアは、手を横に振った。「あなたの子供は、絶対預言者じゃない。もしあなたが、本当に誰とも関係を持つてなくて、こうなつてるとしたら、子供は悪魔か魔物の子よ。そうじゃなくて、あなたが嘘をついてるだけだと

したら、子供は単にハラームな子供^{※3}、というだけ！」

「それで、あなたは、私のことを本当に信じてくれるの？ もういい。私は、あなたをたった一人の親友だと思ってた。この世でたった一人、私を信じしてくれる人だと思っていた」

※3 ハラームは、イスラームで禁じられたものや行為のこと。婚外の性行為はハラームとされる。

マリアの妊娠が婚外交渉によるものなら、生まれてくるのは、悪魔や魔物ではなく、単に不義（ハラーム）の子にすぎない、というロジック。

「私が信じていても、信じていなくても、大きな違いはない。確かなのは、あなたは頭が固くて、私の言うことを聞かないってこと。もう付き合ってもらえない。そうね、もし知りたいなら言うわ。私は、あなたの言うことが信じられない」

「もういい。それなら、なぜまだここにいるの？」 マリアは挑発した。

サスキアは、何も言わずに、マリアの部屋から出て行った。マリアは本当に一人になってしまった。いや、子宮の中の赤ちゃんと二人きりになった。もう、彼女を信じてくれる人は現れないだろう。誰もが、不貞者として彼女を非難するだろう。

でも、構うものか！ これは私の子だ。これは私の人生。そして今は二〇一六年なのだから。

シングルマザーになることは、二〇一六年にはそれほど奇異なことではない。彼女は、ムスリムがマジヨリティーの国に住んではいるが、だからと言って、不貞の廉でむち打ちの刑に処せられるわけでもない。でもやはり、このことは、両親や兄弟、親戚には知られないよう、知恵を絞らねば。出産のために、もっと多くのお金を準備しなければならぬし、お腹が大きくなった時に、安全に身を隠しながら過ごせる場所も考えておかねばならない。そして、赤ちゃんが生まれた後、どこに住むかも考え始めねば。そう考えると急に頭がくらくらしてきた。一度に考えなければならぬことが、なんと多いことか。

マリアは、その後の日々を一人で、強気に過ごした。いつものように会社に通い、それまでと何も違いがなかったかのように振舞った。いつもよりもゆったりとした服を着るようになったが、それを変だと思う人はいなかった。五か月目に入った頃、何人かの人から、太ったんじゃない、と言われたが、でも同時に、よりきれいになったね、とも言われた。マリアは、何も悩みがないかのように笑顔を振りまいていたが、夜には、しょっちゅう一人で泣いた。彼女は、モデルの仕事を断り続けていた。露出が高い服や身体にフィットする服を着れば、妊娠していることがすぐに分かってしまうからだ。

別の町に住む両親が、会いに来た。マリアは巧みに、身体を全て覆う服を来て、最近、食えることが本当に好きだと、楽しみに話した。両親は、彼女の血色がよく、元氣そうなのを見て、嬉しげだった。妊娠七か月になっても全てが順調なことは、マリアにとって驚きだった。

けれども、妊娠を隠すのはだんだん難しくなっていた。どんなにゆったりとした服を着ても、大きなお腹は目立ってしまう。でも、彼女は何もなかったかのように、冷静に、またエレガントに振舞った。周囲が自分のことを話し始めていることにマリアは気づいていた。好奇心丸出しで、じろじろ見られることもあった。みんな、彼女が結婚していないことを知っていた。でも、他人には関係のないことだ！

同僚の中には、直接聞いてくる者もいた。マリアは、どんなリスクがあるうとも、包み隠さず事実を話そうと決めた。様々なコメントが、容赦なく彼女を襲った。

「まったくどうかしてるよ、自分が聖母マリアだと思ってるのか？ 名前が同じだからって、変な夢見るなよ」

「自分がマリア様みたいだって思うなんて、恥ずかしくないのかしら。セックス雑誌のモデルでしょ」

「もう二〇一六年だろ。夫がいない女性の妊娠も、そんなにおかしいわけじゃない。正直に話してくれば、相手の男が責任を持つように、みんなで彼女をサポートしようじゃないか」

彼女の妊娠の噂は、次第に広まり、ますます多くの人がマリアを奇異な目で見るようになった。どこから話が行ったのか、別の町に住む家族にも、とうとう妊娠が知られてしまい、さらに彼女が副業として男性雑誌のモデルをしていることも知られてしまった。まるで誰かが故意に、マリアとマリアの家族を辱めるため、全ての秘密をばらしたかのようだった。出産予定日間近、マリアは実家に戻らされた。彼女の帰省は、実家の近所や昔の友達たちの間でも大いに噂になった。夫がいないのにマリアは妊娠し、男との関係なしに妊娠したと言い

張っていると。

「相手は誰なのか？」 両親は泣きながら彼女に聞いた。マリアは黙ったままだった。彼女は、両親に手紙を渡していた。中身には、両親への謝罪と、この妊娠が本当に男性との関係なしに起こったものだということ、また、彼女は精根尽き果てていて、赤ちゃんが生まれるまで何も話したくないと書かれていた。

灼熱の太陽が降りそそぐある日中、ちょうど九か月と九日目にマリアは出産した。女の子だった。この知らせは、瞬く間に友人たちに広まった。みんな困惑した。聖母マリアだとか言っていたのに、預言者を産んだわけじゃなかった、救世主が生まれたわけではなかったと。一方、マリアは気にしていなかった。赤ちゃんに熱心におっぱいをあげながら、横になっていた。女の赤ちゃんは彼女の目を見つめ、そして言った。「お母さん、私、生まれてこられないかと思った。この世はもうずっと長く信じることを止めてしまっているのね」マリアは小さな娘を抱きしめて言った。「でも私は信じている」

フェビー・インディラニ著『処女でないマリア』(Pabrikultur、二〇一七)収録
「処女でないマリア」

※本作品は、『中東現代文学選2020』所収予定の作品です。

※本作品の無断転用を禁じます。著作権は著者・翻訳者に帰属します。